

詩をよむ 2

あたり前なこと —谷川俊太郎「ぼくは言う」

あたり前なことをあたり前と思わないで、考えてみよう、と哲学者は言う。

あたり前なことをあたり前にするために、法律に書いておこう、と法学者は言う。

あたり前なことがどのようにあたり前になっているかを調べよう、と文化人類学者は言う。

でも、ふつうはあたり前なことについては考えないし、書かないし、調べたりしない。あたり前なことについて考えるのはたいへんだし、書くのは面倒だし、調べるのはけっこう難しいそうだ。

でも、生きている中で楽しんでいる「あたり前なこと」については、はっきりとそのことが楽しい、幸せだ、素晴らしい、と言ってみたくならないか？

谷川俊太郎（たにかわ しゅんたろう）の詩はそう問いかけている。

ぼくは言う

たにかわしゅんたろう
谷川俊太郎

おおげさなことは言いたくない

ぼくはただ水は透（す）きとおって冷たいと言う

のどがかわいた時に水を飲むことは

にんげん しゃわ
人間のいちばんの 幸 せのひとつだ

かくしん い おお
確信をもって言えることは多くない

ぼくはただくうきはおいしくていい匂いだと言う

い いき
生きていて息をするだけで

にんげん
人間はほほえみたくなるものだ

あたりまえなことは何度でも言っている

ぼくはただくじらはおお
鯨は大きくてすばらしいと言う

くじら うた き
鯨の歌うのを聞いたことがあるかい

なぜ にんげん は
何故か人間であることが恥ずかしくなる

そして人間についてはどう言えばいいのか

あき みち こ か
朝の道を子どもたちが駆けてゆく

ぼくはただだま
黙っている

ほとんどひとつのきず
傷のように

そのすがた ころ きざ
姿を心に刻みつけるために

たにかわしゅん たろうしょうねん ししゅう りろんしゃ
『どきん—谷川俊太郎少年詩集』理論社より

「水が透きとおって冷たい」こと、「のどが乾いたときに水を飲むと 幸せな気

ぶんになる」こと、「^{くうき}空気は^{おいしく}おいしくて^{いい}いい匂い」が^いすること、「^{いき}生きていて^{いき}息を^すするだけで、^{ほほえ}ほほえみ^たたくなる」こと、「^{くじら}鯨が^{おお}大きくて^{すば}すばらしい」こと、こうしたことは「^{まえ}あたり前な^{こと}こと」だ。

^{わたし}私たちは「^{まえ}あたり前な^{こと}こと」に^な慣れて^{しま}しまっていて、^{なに}それについて^{なん}何も^{かんが}考^ええない。でも、こうした「^{まえ}あたり前な^{こと}ことは^{なん}何度でも^い言って」、その「^{まえ}あたり前な^{こと}こと」の^{たの}楽しさ^ををかみ^{しめ}しめることは^{たいせつ}大切な^{んだ}んだな、^{おも}と思った。

^{くじら}鯨は^{くち}口から^{おと}音を出して^{なかま}仲間と^{コミュニケーション}コミュニケーションを^ととっている。それが「^{くじら}鯨の^{うた}歌」だ。^{くじら}鯨の^{うた}歌は、^{3000km}3000km^{さき}先までと^{どく}どく^{こと}ことがある^{そう}そうだ。^{くじら}鯨の^{うた}歌は^き聞いた^{こと}がないけれど、^{まえ}ずっと^{まえ}前に、^{おきなわ}沖縄の^{うみ}海で、^{おお}大きな^{くじら}鯨が^{かいめん}海面から^{おお}大きく^と飛び^は跳ねるの^をを見た^{こと}がある。^{かんどう}感動的^だだった。

だから、^{くじら}鯨に^{せつ}接した^{とき}ときに^{かん}感じる「^{にんげん}人間である^{こと}の^は恥ずかしさ」について^わも^き分かる^き気がする。生きものの中で、^{なか}人間^{にんげん}だけが、^い生きもの^のの「^{まえ}あたり前」から^{はず}外れているように^{おも}思う^{から}からだ。

^{ねん}2021年の^{いま}今、^せ世界中^{かいじゅう}で^{にんげん}コロナウィルスが^{にんげん}人間をお^そそっている。しかし、^{かんきょう}環境^{はかい}破壊などで、^{ちきゅう}地球^やほかの^い生きもの^{たち}たちをお^そそっている。^{ちきゅう}地球^やほかの^い生きもの^{たち}たちにとっては^{にんげん}人間^{ほう}の方が^いウィルス^ななのではないか。そうした^{にんげん}人間^のの^{すがた}姿^{について}について、「^いどう^い言^えば^いいい^{のか}のか」？ ^{とく}特に、^{じんせい}人生の「^{あさ}朝」を^い生きる^こ子ども^{たち}たち^{に対して}に対して、「^いどう^い言^えば^いいい^{のか}のか」？

^{わたし}私も^し詩人^{おな}と同じに「^{だま}ただ^{だま}黙^っている」。^{みらい}未来^むに向かって「^こ子ども^{たち}たちが^か駆^けて^{ゆく}ゆく」^{すがた}姿^をを「^{こころ}心^{きざ}に^{きざ}刻^みつ^ける」^{こころ}こころ^{なか}中の^{すがた}その^{すがた}姿^をを「ひ

とつの傷』として受け止めていくしかない。

(1268字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)

<参考資料>

・谷川俊太郎『どきん—谷川俊太郎少年詩集』(理論社、1983年)

★谷川俊太郎のほかの詩集1冊と、翻訳詩集1冊を紹介します。

・谷川俊太郎『ことばあそびうた』(福音館書店、1973年)

・谷川俊太郎『マザー・グースのうた 第1集 おとこのこってなんでできてる おんなのこ
ってなんでできてる』(草思社、1975年)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この
作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use
this work, please indicate the source as in the example above.